

## 勿凝学問 273

2008年新春に予測した三つ巴の論戦、その後  
天皇誕生日の講演での、「選挙権を国に返上する権利を認めてもらいたい」の意味

2009年12月25日  
慶應義塾大学 商学部  
教授 権丈善一

一昨日の天皇誕生日に、「[これからの社会保障政策を考える国際フォーラム](#)」で講演をした。前日の懇親会から一緒だったフォーラムの主催者さんたちが、民主党だ、自民党だと政治話をしているんだけど、あまり的確な状況把握をしていなかったことと、僕の前の講演は政治学者の宮本太郎先生だったというふたつの事情があったので、少し政治向きの話でもしようと思い、講演のはじまりは、次のスライド——丁度2年前の2007年12月に書き、2008年1月7日『週刊社会保障』新春論壇として公になり、ちょっと話題になった文章——からはじめた〔新春論壇 [社会保障関係者、2008年の選択——国論三つ巴となる財源調達論](#)』『週刊社会保障』No.2463, J2008年1月6日〕。

### 国論三つ巴となる2008年

- 今年には社会保障に関わる人たちは、三つの立場のうちいずれに付くかの選択を迫られる。社会保障に用途を限定した租税・社会保険料の負担増を言う第一の立場を支持するか、社会保障のためと言えども負担増は許せず政府のムダを削除して財源を確保すると言い切る第二の立場を応援するか、それとも、再分配は成長の足枷になるとみて成長重視の視点から社会保障を最小限に留める第三の立場を信じるかである。二〇〇八年は、これら三つ巴の論戦が展開されることになる。
- 「社会保障関係者、二〇〇八年の選択——国論三つ巴となる財源調達論」『週刊社会保障』



- 早晚とは言わないが、いずれは第一の立場にある者が勝つ。なぜならば、この国にはこれしか選択肢がないからである。しかしながら、そこにたどり着くまでは紆余曲折はある。その理由は、われわれの生活における社会保障の役割を理解しきれない人、かりに社会保障の役割を理解できたとしてもこれを守るためには負担増しか途はないことを理解しきれない人が普通であり、そういう普通の人たちの意識を利用して権力を手中に収めることをねらう政治家の存在がこれまた普通だからである。
- 「社会保障関係者、二〇〇八年の選択——国論三つ巴となる財源調達論」『週刊社会保障』

Keio University  
Y Kenjoh



そして、今日 12 月 25 日に、1 月に講演を行う全国知事会から、次の連絡がある。

早速ですが、〇〇県さんから、1 月 14 日（木）の講演会における権丈先生への質問をお預かりしました。講演の中でお話いただいても結構ですし、質疑の時間にお答えいただいても結構ですので、ご対応の方よろしく願いいたします。

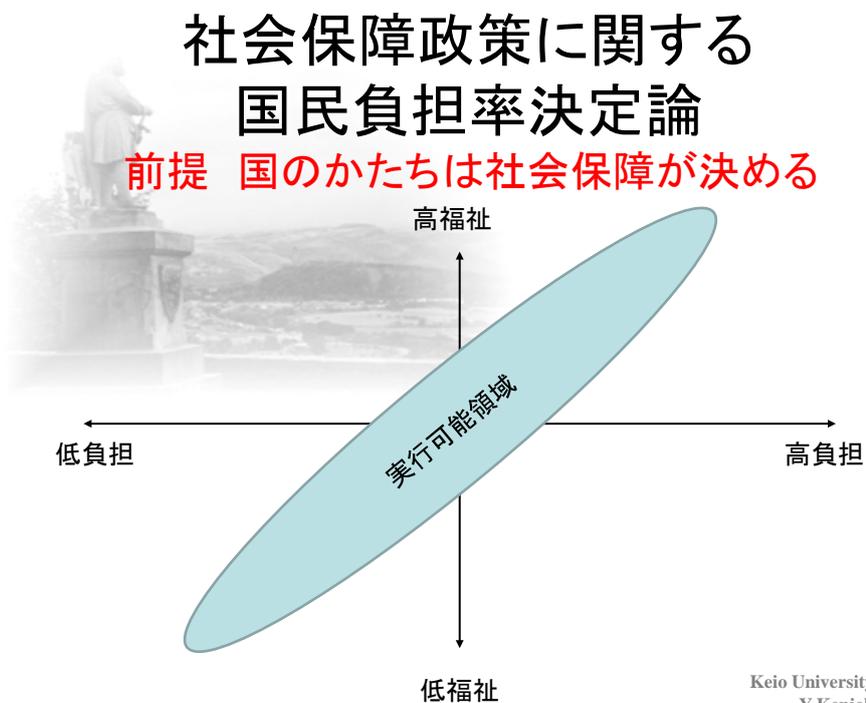
質問の内容は、次である。

週刊社会保障 2008 年 1 月 7 日号において、先生は社会保障の財源論を巡る 3 つの立場を紹介し、いずれは「社会保障に用途を限定した租税・社会保険料の負担増を言う第一の立場」にある者が勝つと書かれている。しかし、本年 8 月の総選挙により「第一の立場」を指向していた麻生内閣は総辞職して、「第二の立場」を突き進む民主党政権に多くの国民が期待している。このような状況のなかで「第一の立場」の人々の巻き返しは可能なのか、先生のご所見を伺いたい。

実に的確な事実認識と問題設定ですね。ちょうどそのあたりを先日の講演で話したというタイミングだったので、来年 1 月の講演を待つことなく、先日の天皇誕生日に話したことを、ここにアップしておきます。まあ、このくらいの偶然は、僕の場合はよくあることです（笑）。

以下、講演内容の該当箇所の概説-----

「いずれは第1の立場にある者が勝つ」という予測は、社会保障政策のあり方は国民負担率次第であるという国民負担率決定論に依存したものであり、この国民負担率決定論は、一昨日の講演で用いた次のスライドの「実行可能領域」しか選択できないという仮定に基づいている。



ところが、11月12日に「勿凝学問 262 社会保障政策に関する国民負担率決定論の検証過程」に書いたように・・・第2の立場の政権の下、国が減びる道を日本が進むとすれば、第1の立場が表に出てきて勝つ前に、国が破綻するという事態になってきたのである。

勿凝学問 262 [社会保障政策に関する国民負担率決定論の検証過程](#)

でも、僕の予測が外れる可能性は十分にある。というのも、社会保障政策に関する国民負担率決定論は、政治家といえども、さすがに権力を維持するために国を滅ぼすことはないだろうという、常識的というか甘い仮定に基づいている。しかしながら、最近、多くの論者に文化大革命を連想させている行政刷新会議の茶番劇を眺めていると、政治家というのは、国を滅ぼしてでも権力に魅力を感じる生き物という仮定を置かなければならないのかもしれないと思いはじめてきた。こういう大衆向けの茶番を演じることができるとのは、もう、ひとつの大きな才能の持ち主たちであるとしか言いようがない。

もし政治家が、国を滅ぼしてでも権力に魅力を感じる生き物であるのなら、僕の予想は外れて、国民負担率が上がらないままに社会保障の給付は増えていき、そして早晚、国が減びることになる。

また、第1の立場が「巻き返し」を図るにも、彼らが目先のことに拘泥し、これまでの

ように国民には分かりづらい道を選択するとなれば、今は自民を支持しようかどうか逡巡している大きな票田を失うことになって、事態はさらに悪化するおそれがあるということも、先日の講演で話をした。

つまり、この国では、実に厄介なことに、第1の立場と第3の立場は、国民負担率の水準、それゆえに社会保障に対するスタンスが相反する立場であるにもかかわらず、ひとつの政党の中に混在しているのである。先日の講演で使ったスライドには、次のようにまとめて、その点を説明した。

## 政治的ポジションと国民負担率

政治的ポジション	国民負担率	所属政党
第1の立場	引上げ	自民の一派
第2の立場	維持もしくは引き下げ	現与党三党、他小政党
第3の立場	維持もしくは引き下げ	自民の一派

10月28日に「勿凝学問 262 [小選挙区とは一神教だよ](#)」に書いたように、中選挙区制の下では、仮に百歩譲るとすれば、第1の立場と第3の立場は共存可能とすることができるかもしれない。しかしながら、小選挙区の下では、何万歩譲っても第1の立場と第3の立場は共存することはできず、どちらかがどちらかを追い出すしか、政党の体をなす道はないのである。

## 勿凝学問257

### 小選挙区とは一神教だよ

- 中選挙区ならば多神教でいいだろうけど、小選挙区とは一神教だよ。
- 自分の選挙区に、信じたくない神しかいない場合の投票者の身にもなっておくれ。
- 小選挙区の下では、仲間内での神々の闘争は、百害あって一利なし。

ところが、そうした、第1の立場と第3の立場が独立する兆しは一向に見えない。となれば、第1の立場は、かつて第3の立場が支配的であったときの党のイメージを国民に抱かれたまま、消えていくおそれが大きい。大衆たちは、民主党だ自民党だという、党の名前のみで政治を語るに留まっていて、自民党の中に、思想的に相容れないグループが一緒に属していることは、まったく分かっていないのである。

普通の人たちは、次のスライドにあるように、かつての与党が、国民負担率の維持もしくは引下げを考える小泉安倍内閣から、国民負担率の引上げを考える福田麻生内閣へと、大きな政策転換を図ったことをまったく知らないでいる。というよりも、第1の立場は、党内での第3の立場に気づかって（足を引っ張られて？）、社会保障の政策転換を図ったことを、総選挙の最中でさえ、全面的に表に打ち出すことさえできないでいた——それどころか、第1の立場が求める中期プログラムを閣議決定する時も、平成21年度税制改正附則を成立させる時も、第3の立場は強く抵抗をみせ、明らかに、当時の与党のイメージを大きくダウンさせていた。

## 政治的ポジションと国民負担率

政治的ポジション	国民負担率	所属政党
第1の立場	引上げ	自民の一派(福田麻生内閣)
第2の立場	維持もしくは引き下げ	現与党三党、他小政党
第3の立場	維持もしくは引き下げ	自民の一派(小泉安倍内閣)

- 小選挙区の下では、第1の立場と第3の立場は共存不可能
- 現段階では、純粋に第1の立場を主張する政党は、この国には存在しない。それがこの国の不幸。
- ちなみに、第2の立場と第3の立場は、政策面では同じになる。これが、国民負担率決定論

32

Keio University  
Y Kenjoh



さらには自民党の党首を決める際にも、第1の立場と第3の立場が闘っていたし、11月に行われた「事業仕分けショー」を、批判する層と、あれを羨む発言をする層が同じ党の中にいたりするから、国民にとっては、まったくもって分かりにくい——分かりやすくすることは、大衆を相手とする商売の最大の秘訣であるにもかかわらず。

2日前の講演で、宮本先生とはほとんど同じ考えだけど、一点違うとすれば、現与党に対する評価でしょうかねと前置きをして、次のような話をした。

今日の大学での立ち話・・・

「審議会を辞めたらしいけど、権丈君は、政権交代はどう思ってるの？」

「そりゃ、評価してるますよ。おかげで、この国からバカな野党がいなくなりましたからね。2大政党制というのは、まともな野党があってはじめて成立する体制。なんでも反対、挙げ句の果てにはガソリン値下げ隊とか編成して「ガンバロー」を三唱するような、あんな政党がある限り、この国ではまともなことはできなかったですから。でも、国民も、取り返しのつかなくなる前に、火遊びもほどほどにしないと」

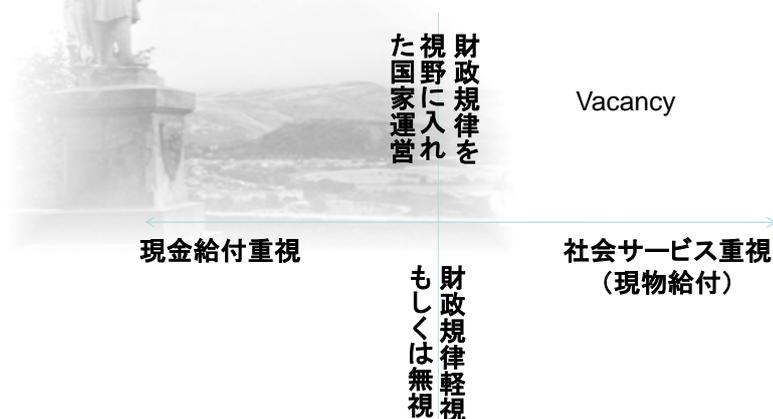
「そうだよねえ。それに三党連立は難しいだろうし」

「まあ、小政党にとっての最適戦略は、来年の参院選で与党第1党に大勝させないことですからねえ……」

それでは、現在の野党に期待しているのかというと、まったくそうではない。23日の講

演でも示したように、僕は、次の図の第1象限——現在は空き部屋(vacancy)となっている第1象限に位置する政党が出てこないことには、選挙に行く気がまったくしないのである。

日本が低福祉であることは不可能  
日本では保守と言えども、英国の労働党、米国の民主党とも微妙な位置、いや、部分的にはそれよりもリベラル



小さな政府路線を指向する米国の共和党、英国のサッチャー時代の保守党は、フリードマン『選択の自由』やハイエク『隷従への道』の世界。保守政権の下でも世界に誇れる国民皆年金・皆保険制度を作る日本では、小さな政府路線は多数派にはなり得まい。



政界というところは、紅組白組に分かれて運動会をしているようなところである。いまは、第3象限に位置する、財政規律もなく現金をばらまくことに夢中な政党が与党になっている。これに対立するには、財政規律を視野に入れて社会サービス（現物給付）を重視するポジションがあるはずなのに、野党の中には、「保守」という意味も理解できないままに、第3の立場を主張している者が多数いる。エドモンド・バークにはじまる保守思想の根にはバランス感覚があり、日本で保守をいうのであれば、米国の共和党、英国の保守党に範を求めるのではなく、かつて英国で保守党と労働党の間に挟まれて消えていった自由党——ケインズが支持し、社会保険を導入したロイド・ジョージが率いた自由党あたりに範を求めるくらいでないと、日本の大人たちが支持する大人向けの政党は育たないはずである。しかしながら、そういう政党は、この国には、今のところ皆無。

だから、選挙の時にただ棄権するだけではしゃくだから、と言って、「是非とも、投票権を国に返上する権利を認めてもらいたい。今の日本では、僕は選挙の際、投票権を返上するしか選択肢はなく、ゆえに、この国は、未来がなく、もう、終わったんじゃないかと言いつつ続けているんですよ」と講演で話し、講演を、次の言葉で終えることになるのである。

勿凝学問 262 [社会保障政策に関する国民負担率決定論の検証過程——「真っ逆さーまーにー墮ちてデザイナー♪」という将来予測は、いかなる根拠に基づくのか？](#)

最後に、9月以降、何度か口にして、「このままだったら本当に危ないですよ。何とか言

ってください」と僕をせき立てる人を黙らせてきた言葉で、この文章を締めようと思う。それは、

「あのなあ、国ってのは滅びるもんなんだよ」

「ムダを省き、予算の配分を変えれば財源はある」と言って、何も知らない大衆に大人気の第2の立場に立つ振りをして、かつての野党は政権を獲った。与党になって、公約の撤回をいくつも行ったが、それでも財政規模は大幅に肥大化し、予算編成では税外収入に多くを頼らざるを得なかった。それゆえ、来年度は今年と同じ予算を立てることは絶対に不可能で、さすがに来年度には、自分たちが詐欺集団であることが、大票田をなす大衆層にまでバレてしまうとおそれている。ために、彼らは今後、必死になって、かつての「上げ潮派」と同じ方向に逃げ道を求めるにことになるであろう。そして、新しい上げ潮派が、古い上げ潮派と同様、古くも新しい詐欺話であることをメディアをはじめとした大衆層が理解するためだけでも、またしばらくいたずらに時間が過ぎていくのだと思う。しかしその間、この国はもつのか？

社会保障の将来、というよりも日本の将来はどうしようもなく、政治に何を求めるかではなく、政治からいかにして生活を守るか、社会保障を守るかという観点で世の中を眺めましようというのが、天皇誕生日の「これからの社会保障政策を考える国際フォーラム」でのメッセージのひとつだったわけである。

全国知事会に質問を送られた〇〇県のみなさま、回答はこんな感じでよろしいでしょうかね。いつも言うことですが、大切なことってのは、一言で答えることができないほどに複雑なんです。

ご参考までに

- [勿凝学問 263 福田・麻生時代と現政権、どちらが社会保障重視？—ロナルド・ドーア氏がみる日本の政権交代](#)
- [勿凝学問 240 みんなよくガンバッタよ、日医が自民の負担増路線を支持する時代になったんだもんな—この国ではじめて社会保障の機能強化のために代金の支払いを国民に求める総選挙が行われる](#)